

研究の意義が

問われるなかで

水間 千恵

二〇〇九年はヴィジュアル系から目が離せない一年であった。もちろんコスプレバンドの話ではない。

特筆すべきは、絵本研究の大著二冊。石澤小枝子・高岡厚子・竹田順子・中川亜沙美著『フランスの子ども絵本史』（大阪大学出版会）は、フランス絵本（挿絵を含む）の通史を、カラー図版数百点を収録して語りつくした労作。タイトルは「絵本史」だが、一八世紀の民衆本や最初期の子ども向け雑誌からまんがまでを視野におさめ、ヴェルヌやマロの作品にも頁を割くなど、ヴィジュアル面からまとめたフランス児童文学史としての価値大。ジャポニズムの影響を論じた終章は、比較文化史の観点からも重要。掲載作品の多くは、梅花女子大学図書館所蔵資料とのこと。研究機

関付属図書館と研究者が、それぞれの役割を果たしながら有機的に機能した結果生まれた大きな成果といえる。

もう一冊も、研究者と図書館の協働の成果。三宅興子・香曾我部秀幸編『大正期の絵本・絵雑誌の研究——少年のコレクションを通して』（翰林書房）が考察対象としているのは、札幌中央図書館が市民から寄贈を受けて整理・保存・公開してきた池田コレクション。明治末から大正にかけての絵本・絵雑誌等二八一点の資料からなるこの資料が、明治生まれの少年の蔵書だったという事実をつきとめた著者たちは、持主と彼が生きた時代背景に目配りしつつ、従来のなテーマ論にとどまらず、美術・言語など多面的かつ精緻に分析を行うことで、資料に新たな命を吹き込んだ。絵本・挿絵の分野では、〇八年末の出版物だが、川戸道昭・榊原貴教編『図説 絵本・挿絵大事典』（大空社・ナダ出版センター）も紹介しておきたい。挿絵や装幀から児童書の歴史を綴った第一巻と画家事典の第二、三巻からなり資料的価値が高い。同じ出版社の『図説 翻訳文学総合事典』もヴィジュアル重視の事典五巻本。翻訳受容史の基礎資料であり、児童文学作品も数多く含まれる。

君島久子『「王さまと九人の兄弟」の世界』（岩波書店）は、絵本として日本の子どもたちにも広く知られている中国民話について、類話の地理的広がり、紀元前の古文獻にまで遡るルーツを説き明かし、読者を空間と時間の旅に